

入院治療を行った急性喉頭蓋炎の臨床像

福崎 勉¹⁾ 菅村 真由美^{1,2)} 宮城 司 道¹⁾ 中川 尚 志²⁾

1) 福岡大学筑紫病院 耳鼻咽喉科

2) 福岡大学 医学部 耳鼻咽喉科

Clinical Features of Acute Epiglottitis under Admission

Tsutomu FUKUZAKI¹⁾ Mayumi SUGAMURA^{1,2)}, Morimichi MIYAGI¹⁾,
Takashi NAKAGAWA²⁾

1) Department of Otorhinolaryngology, Fukuoka University Chikushi Hospital

2) Department of Otorhinolaryngology, Fukuoka University School of Medicine

Clinical features of epiglottitis in 41 patients admitted to Fukuoka University Chikushi Hospital were investigated. Middle or elder males were predominant. The number of patients was the least at the winter season. Most of the chief complaints at the visit was pharyngeal pain, whereas sore throat, dyspnea and hoarseness were less. There was a significant relations between the grade of epiglottis swelling and an increase in white blood cell count.

急性喉頭蓋炎は急激に呼吸困難をきたすことから、時に緊急に気道確保が必要となる疾患である。欧米においては小児の疾患とされているが、本邦においては成人例が多いと報告され、欧米と臨床像が異なっている。このため、われわれは、入院治療を行った急性喉頭蓋炎の臨床像の検討を行った。若干の文献的考察を加え報告する。

対象と方法

対象は、1997年4月から2006年10月までに福岡大学筑紫病院で入院加療を行った41症例である。

1) 年齢・性別, 2) 発症時期, 3) 発症から来院までの日数, 4) 初診時症状, 5) 喉頭所見, 6) 血液検査結果, 7) 治療の7項目について検討した。初診時の喉頭所見は、井口らの報告¹⁾に

従い、喉頭蓋の腫脹により3段階に分類した。喉頭蓋の腫脹が著しく声門が全く観察できないものを高度腫脹群、声門の一部のみが観察されるものを中等度腫脹群、喉頭蓋の腫脹が軽度で声門が観察できるものを軽度腫脹群とした。

$P < 0.05$ で統計学的有意差があると判断した。統計に用いた方法は本文中に記した。

結 果

1. 年齢・性別

平均年齢は55歳で、27歳から81歳までの幅広い年齢層に分布していた。(Fig. 1) 男性では50歳代から60歳代に発症のピークを認め、50歳代から60歳代までが全体の50%以上を占めた。女性では発症のピークはみられなかった。性別では男性27例、女性14例と男性に多くみられた。

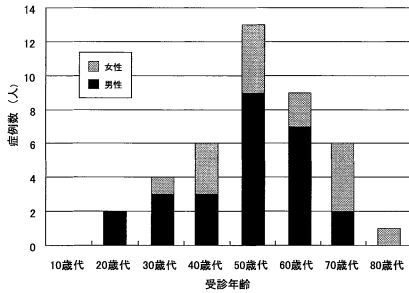


Fig.1 Age and gender of patients

2. 発症時期

急性喉頭蓋炎の発症時期は、3月が7例(17%)、7月が6例(15%)、10月が5例(12%)の順で多かった。(Fig.2) 3-5月を春、6-8月を夏、9-11月を秋、12-2月を冬として、季節別の発生件数を比較した。冬に有意に発症件数が少なかった (P<0.05, メディアン検定)。

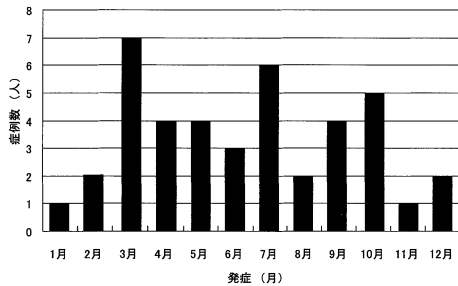


Fig. 2 Month of occurrence

3. 発症から来院までの日数

発症から当科受診までの日数は、平均2.8日で、41例中27例(66%)と過半数が2日以内に受診していた。(Fig.3) なお気管切開術を必要とした4例はいずれも2日以内に受診していた。

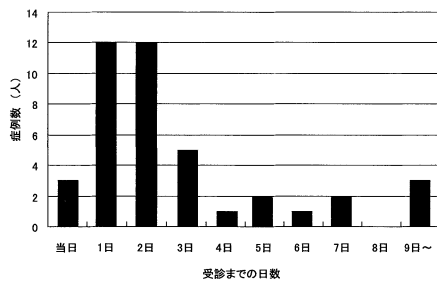


Fig.3 Days of visit after notification of subjective symptoms

4. 初診時症状

咽頭痛が41例中40例(98%)にみられ最多で、次いで嚥下痛が12例(29%)、嘔声が5例(12%)であった。呼吸苦を訴えた症例は5例(12%)であった。

5. 喉頭所見

初診時の喉頭蓋の腫脹の程度をFig.4に示した。高度腫脹群は7例(17%)、中等度腫脹群は17例(41%)、軽度腫脹群は17例(41%)であった。気管切開術を行った4例は、高度腫脹群が3例、中等度腫脹群が1例であった。

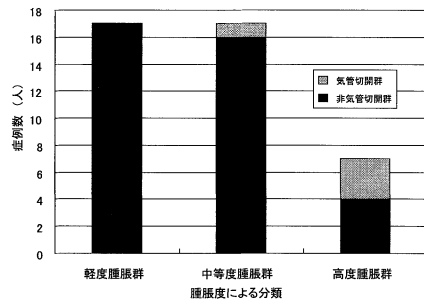


Fig. 4 Number of patients classified by the grade of epiglottitis swelling

6. 血液検査結果

当科受診時の急性炎症反応(末梢白血球, CRP)をみると大多数で上昇を認めた。白血球正常でかつCRP陰性の症例も3例みられたが、これらはいずれも軽度腫脹群であった。気管切開術を必要とした4例は、いずれも急性炎症反応が上昇していた。末梢白血球数10000/ μ l未満の症例12例中、半数の6例が軽度腫脹群で、高度腫脹を呈したものは1例のみであった。一方、末梢白血球数20000/ μ l以上の5例では軽度腫脹群は認めなかった。喉頭蓋の腫脹の程度と白血球数の増加に有意の相関を認めた (P<0.05, メディアン検定) (Fig.5)。

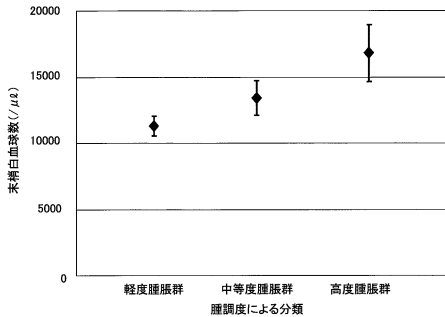


Fig. 5 Relationships between the grade of epiglottitis swelling and white blood cell count

7. 治療

抗生剤の全身的投与は全症例で行われた。35例がセフェム系 (85%)、4例がカルバペネム系 (10%) を使用し、その他、テトラサイクリン系、ペニシリン系が1例ずつであった。また、8例 (20%) がCLDM (クリンダマイシン) を併用した。ステロイド剤を併用したのは29例 (71%) であった。

8. 気管切開術を施行した症例について

気道確保が必要であったものは4症例 (11%) で、いずれも気管切開術を行った。そのうち、喉頭蓋の腫脹は高度腫脹が3例、中等度腫脹が1例で、披裂部、披裂喉頭蓋ヒダの腫脹を伴っていた。糖尿病などの合併症はなく、喫煙歴は2例にみられた。気管切開術は、受診日当日に施行したものが3例、増悪し4日目に施行したものが1例であった。

考 察

急性喉頭蓋炎は欧米においては小児の疾患とされている。しかし、本邦においては成人例が多く、小児例はまれであると報告されている¹⁻⁸⁾。われわれの症例においても、小児例はなく、すべて20歳以上の成人例で、50歳代にピークを認めた。性別でも、男性に多く、本邦における諸家の報告¹⁻⁸⁾と同様に中高年の男性に多くみられた。

急性喉頭蓋炎の発症時期は、春から夏にかけて多い、季節の変わり目に多いなどと報告されている¹⁻⁷⁾。われわれの検討でも、3月、7月、

10月と季節の変わり目に多くみられた。一方、急性喉頭蓋炎は急性炎症で、冬に多いとの印象があるが、意外なことに12月から2月の冬場にかけて有意に入院患者数が減少していた。

発症から来院までの日数は、3日以内に大多数の患者が当院を受診していた。急性喉頭蓋炎になる症例は急速に症状が増悪することが示唆される。なお気管切開術を必要とした4例はいずれも2日以内に受診していた。諸家の報告¹⁻⁸⁾でも同様であった。

主訴は、咽頭痛がほぼ全例にみられ、次いで嚥下痛、嗄声の順であった。急性喉頭蓋炎で特徴的と思われる呼吸苦を訴えた症例は12%でしかなかった。このことは、咽頭痛のみで重篤な症状を伴っていない急性喉頭蓋炎が喉頭の観察を行わない内科医で、通常の急性上気道炎として診断され、治療されている可能性を示唆している。

受診時の急性炎症反応 (末梢白血球, CRP) をみると大多数で上昇を認めるとされている。われわれの検討でも同様に急性炎症反応の上昇を認めた。一方、岡本らは、気道確保を要した症例の中にも白血球正常でかつCRP陰性の症例の存在 (7.0%) を報告²⁾し、重症度との相関を認めないとしている。本検討において、白血球正常でかつCRP陰性の症例が3例 (7.3%) あったが、これらはいずれも軽度腫脹群であった。気管切開術を行った4例は、いずれも急性炎症反応の上昇例であり、岡本らの報告と異なっていた。特に白血球数において、喉頭蓋の腫脹の程度と白血球数の増加に相関を認めた。

ま と め

福岡大学筑紫病院耳鼻咽喉科において入院加療を行った急性喉頭蓋炎の41例について検討を行った。中高年の男性に多くみられた。発症時期は冬に少なかった。初診時の自覚症状は咽頭痛がほとんどで、嚥下痛や呼吸苦、嗄声を訴えるものは少数であった。喉頭蓋の腫脹と白血球数の増加に相関を認めた。

参 考 文 献

- 1) 井口芳明, 設楽哲也, 高橋廣臣・他: 急性喉頭蓋炎の臨床的検討-気道確保を必要とした症例について-, 日気食会報, 45: 1-7, 1994.
- 2) 岡本充史, 中村学, 信清重典・他: 急性喉頭蓋炎127例の臨床的観察, 聖マリアンナ医科大学雑誌, 31: 227-232, 2003.
- 3) 宇和伸浩, 八田千広, 辻恒治郎・他: 急性喉頭蓋炎症例の検討, 耳鼻臨床, 96: 9; 811-817, 2003.
- 4) 志村玲緒, 寺山善博, 長船宏隆・他: 当科における急性喉頭蓋炎症例の検討, 耳喉頭頸, 75 (12): 876-879, 2003.
- 5) 飯田実, 部坂弘彦, 松井真人・他: 急性喉頭蓋炎170例の臨床的検討, 耳展, 42: 4; 374-379, 1999.
- 6) 香取秀明, 佃守, 田口享秀・他: 急性喉頭蓋炎の臨床的検討, 耳喉頭頸, 76 (10): 721-724, 2004
- 7) 橋木大門, 八尾和雄, 西山耕一郎・他: 急性喉頭蓋炎237例の臨床的検討, 日気食会報, 55 (3): 245-252, 2004.
- 8) 宮城司道, 道祖尾直知, 柴田憲助・他: 急性喉頭蓋炎12例の臨床的検討, 福大医紀28: 11-16, 2001.

連絡先: 福崎 勉
〒817-0067
福岡県筑紫野市大字俗明院 1-1-1
福岡大学筑紫病院 耳鼻咽喉科
TEL 092-921-1011